

# 上位機で開発した技術を結集 「IV」を冠したシリーズ中核機

エントリーから一歩進んだスマートモデル

TechDAS

## Air Force IV

アナログプレーヤー（アームレス）

¥2,750,000(税込)

2025年9月中旬発売予定

### Specifications

●駆動方式:精密両面研磨 ポリエステル繊維平ベルトドライブ●ワウフラッター:0.03%以下●総慣性モーメント:734kg・cm<sup>2</sup>●サイズ(フット含む):420.5W×168H×368Dmm●質量:34.3kg●消費電力:50W●取り扱い:(株)ステラ

### Profile

独自のエアアーテクノロジーにより、静寂性や高いSN比といったデジタルの利点をクリアし、“現代のアナログサウンド”を実現するAir Forceシリーズ。最新作となるAir Force IVは、アルミ無垢のブロックから切削加工した一体型プラッターや、低振動2相4極ACシンクロナスモーター、特殊な4本のサスペンションフットなど、上位モデルの技術を出し惜しみなく搭載。価格を抑えながらも、エントリーモデルのAirForce Vから一歩進んだエアアーフォース・テクノロジーが楽しめる画期的なプレーヤーである。

レコードプレーヤーの筐体は最終進化形を暗示するようだ

テクダスがAir Force IVを発表した。

テクダスはハイエンドオーディオ機器の輸入商社、ステラ／ゼファンの創業者である故・西川英章氏が、自らが理想とするレコードプレーヤーを実現するために興したブランドである。その初号機であるAir Force Oneが世に出たのは2012年のこと。プラッターを空気で浮かせつつレコード盤を空気で吸着するその機構と、巨大かつ高剛性なその筐体はレコードプレーヤーの最終進化形を暗示しているかのようだった。そして同社はAir Force Oneの兄弟たちを次々と市場に送り出す。

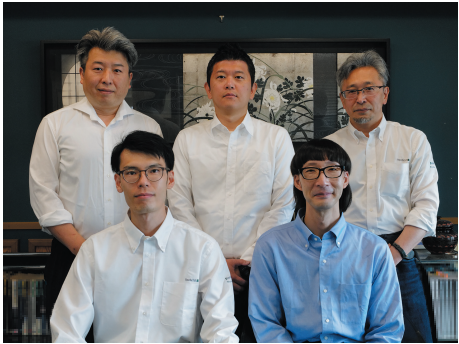
Air Force IVはエントリーモデルの「V」のアップグレードバージョンに位置づけられる。「V」ではプラッターの下部に仕込まれたサブプラッターをモーターが駆動するのに対して、「IV」では主筐体左部の2本の強固なブラケットに吊り下げられたモーターが「One」と同様の無垢アルミプロ

ックを切削加工した8・7kgプラッターを回転させる。ポリエステル繊維製の駆動ベルトは比較的幅広・薄型で、素材の共振モードを排除すべくテンションはぎりぎりまで低く抑えられている。主筐体・モーター部とも材質はプラッターと同じアルミニウムの削り出しで、剛性は極めて高い。電源部は別筐体で、これにエアポンプが内蔵されている。本体とはケーブルと2本のエアパイプで接続される。トーンアームは最多で3本まで搭載可能。2本目からはアームベースを買い足す必要がある。

試聴機に取り付けたトーンアームはイケダの12インチモデルIT-407CR-1。これはテクダスブランドのトーンアーム、Air Force 10との価格的なバランスを考慮しての選択である。これにテクダスのダイヤモンドカンチレバー・カートリッジTDC-001Diaを装着して取材を実施した。本機の操作はフロント側手前のパネル上で行う。回転数を示すボタンを押すとプラッターが回転しはじめる。所期の回転数が得られるとインジケーターにLockの文字が表示されて回転

Text by  
石原 俊  
Shun Ishihara

Photo by 田代法生



株式会社ステラ  
TechDAS開発・製造チーム  
(写真左上から時計回りに)

丹治正人氏、福地泰樹氏、清水 一氏  
山本章央氏、青柳幸平氏

オリジナルAir Force IIIと同価格帯で、同等の性能を備えたモデルの登場を望む声をいただいております。そこで2年前から開発を開始し、コンパクトな筐体を活かしつつ、上位機種 of 技術を可能な限り取り入れました。アルミ無垢の重量プッタターや本体から隔離した低振動モーター、上位機種と同じ特殊表面研磨ポリエステルベルト駆動、Air Force III Premium S同等のサスペンション構造等により、高精度な回転と高S/N比を実現。小さくても音の立体感や解像度に妥協のないAir Force IVが完成し、昨年のAir Force 10に続き、TechDASシリーズのラインアップをさらに充実させることができました。

以下にジャンル別のインプレッションを記す。ジャズは清潔

意図した刺々しい音でも「美しく」聴こえる音だ

以下にジャンル別のインプレッションを記す。ジャズは清潔

な空間に突如としてホットなプレイが展開する、高S/Nプレーヤーではお馴染みの表現が当初は印象的であった。だが、そこから先があるのだ。ロックにもクラシックにもあることだが、ジャズでは楽器の音色を意識的に歪ませるケースがままある。これは「音を割る」とか「ディストーションをかける」ともいう演奏法で、演奏者が意図的に刺々しい音を発することで表現の幅を広げる行為である。先ほどもちらりと触れたが、演奏者が意図しない限り本機は刺々しい音を出さない。では意図した場合はどうなるのかというと、もちろん刺々しい音にはなる。だが、刺々しいといえども、そ

の音は「美しく」聴こえるのだ。ここが本機最大の音楽的特徴と言えるのかもしれない。

ヴォーカルは録音にもよると思うが、少なくとも筆者が試聴に供したサラ・ヴォーンの『アフター・アワーズ』ではリアリズムとは少し違う傾向の音が出たように思う。サラがそこにいて筆者のために歌ってくれているというよりも、マイクロフォンや録音設備の質感が音に乗っているのだ。いわゆるナローレンジでは決してないし、音像や

音場が汚れているわけでもないのだが、前世紀中頃の機材の共振モードが乗っているように感じられる。だが、その共振モードにビンテージ感があつて、思わず「いい音だ！」と心の中で叫んでいる自分を発見する。

クラシックはマーラーの3番を聴いたのだが、冒頭の8本のホルンの強奏が素晴らしかった。このくだりはホルンの音が好むと好まざるにかかわらず割れてしまふのだが、ジャズで聴けたのと同様、歪んだ音が美しい。メロディは途中からはほぼ二つに分かれるのだが、どの奏者がA旋律を吹き、どの奏者がB旋律を吹いているのかが「見える」かのような高分解能で描かれる。この視覚的な表現もまた本機の音楽的特徴だと言えよう。

本機の価格は絶対的に見て高い。だが、非現実との境界ぎりぎりに留まっているように思う。その意味合いで、手に入れられる可能性のある世界最高峰の製品である。

## 試聴音源



『トゥー・コード』大橋祐子トリオ  
(寺島レコード TYLP-1071)



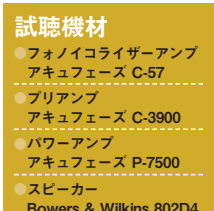
『Snapper』松尾 明  
New Frontier Quintet  
(寺島レコード TYLP-1013)



『After Hours』  
Sarah Vaughan  
(Roulette YW-7518-RO)



『マーラー：交響曲第3番二短調』  
ヤッシャ・ホーレンシュタイン  
(UNICORN PAC-3514-15)



試聴機材  
●フォノコライザーアンプ  
アキュフェーズ C-57  
●プリアンプ  
アキュフェーズ C-3900  
●パワーアンプ  
アキュフェーズ P-7500  
●スピーカー  
Bowers & Wilkins 802D4

が安定する。フローティング式のターンテーブルとしては非常に早く回転の安定が得られるのでもどかしさを感じることはない。Lockが表示されたら右側のsuctionボタンを押して吸着を開始する。プッタター面との間の空気が抜けることでレコードが固着するとともに平面性が高まる。したがって少々反りのある盤でも平面に近い状態で再生することが可能だ。

新試聴室を使い始めて鳴った「最良の音」といっても良い

イベントやメーカーの試聴室等でAir Forceシリーズには何度か接しているが、試聴というかたちで向き合うのは初めてのこと。極めてハイエンドオーディオ的な音である。現代最先端の超高級オーディオサウンドの要素を集めてきて凝縮したような音といってもいい。これは同社のカートリッジに負うところも大きいと思われるのだが、まずは音像の質感が美しい。瑞々しい潤いがあつて、耳に美味しく、品格が高い。作曲家や演奏者が意図したもの以外、刺々しさのようなものはどこをどう探してもない。

音場は極めて清潔だ。アナログ再生にありがちな雑味(それを「味わい」とか「コク」と呼ぶ人もおられるだろう)がなく、キレイな空気が試聴室の壁を突き抜けてどこまでも広がっている。静粛性も高い。清潔で静かな音場を「聴感上のS/N比が高い」などという言い回しでしばしば描写するが、そういった手垢にまみれた言い方をするのが気恥ずかしくなるほどだ。本誌新試聴室を使い始めて1年と2カ月が経過したが、本機の音こそがこの部屋で鳴った最良の音といつても過言ではない。

エアーでプッタターを浮かせるというアイデアはテクダスの「専売特許」というわけではない。代表例としては旧マイクロ精器の製品が挙げられるが、こまで完成度が高く、エアーフロートリングが聴感上のS/N比に貢献している例は寡聞にして知らない。マイクロ製のプレーヤーはプッタターに盤を吸着させる機構も有していたが、ポンプの静粛性は本機のほうが数段優れている。実をいうと西川英章氏はかつてマイクロに在籍していた。テクダスの物作りにはいまはなきマイクロ精器へのオマ



コンパクトなボディを実現しながら、最大3本のトーンアームを装着することができる。シャーシとモーター部は、アルミニウム(A5052)製地シルバールアルマイト仕上げを採用



シャーシから切り離されたドライブモーター部は、上位モデルと同じ低振動2相4極ACシンクロナスモーターを採用。電源は、パワーアンプ駆動デジタル回転制御となる



リアパネルには、パワーサプライ部に繋ぐ「Flotation」「Vacuum」端子を装備(その他は、製品出荷時に変更になる場合あり)。駆動ベルトは上位と同じ幅4mmの平ベルト採用する



パワーサプライ部。サイズは350W×160H×270Dmm、質量は9kg



お好みのトーンアームに合わせて製作してくれるベースがひとつ付属する



プッタターを外した状態。レコード盤センター穴のガタツキを吸収するテーパー・スピンドルを搭載する



Air Force III Premium Sと同じ制振材を組み込んだサスペンションフットを採用



8.7kgの重量を誇る、アルミニウム(A5056)精密切削加工一体型のプッタター